

# RI 会長主催 南アジア親善会議

ロータリアン誌3月号より

## 略報

R. ザイゲラー

Goodwill in South Asia by R. Ziegelaar

南アジアの国々から1,200人の善意の男女がスリランカのコロomboに集って、RI 会長主催親善会議を開いた。このように多くの人々が参加したということ自体、この地域が抱えている問題の大きさを示すものといえる。スリランカのロータリアンは、善意は善意を招くとの信念で、海外から来訪したこれら“いとこ”たちをもてなし、彼等が会議に気持よく参加し、経験を豊かにしてこの国を去ることができるよう懸命につとめた。

この会議の雰囲気は、向笠広次 RI 会長と喜代子夫人が、南アジア最高の会議場とされるバンダラナイケ記念国際会議場に到着したときはっきりと示された。会長夫妻はスリランカの栄光の時代の名残りをとどめる王室儀典をもって迎えられたのである。はなやかな衣装をまとった女子音楽バンドの演奏のなかで、国際ロータリーの徽章を描いた美しい布で巨大な体をおおった象が会長夫妻を歓迎し、王室行列のマナーにしたがって向笠会長が象の背に乗るとき、こ

の象はなんと会長にうやうやしい会釈のジェスチャーを示したのである。

この時点で、会議の成功は約束されたといつてよい。数分おくれて、スリランカ元首 J. R. ジャワルダナ大統領が到着し、最高の荣誉礼で迎えられ、向笠会長とともに行列の先頭に立って会議場へ向った。

会議はまず、コロombo RC 会員で、この会議の委員長であるパーク・ナデサン氏の歓迎の挨拶で始まり、やがて向笠会長が立って基調講演を行なった。会長はそのなかで「我々はこの地域のバングラデシュ、インド、ネパール、パキスタンそしてスリランカ間の友好と理解をさらに深めようここに集った。現在の世界は我々の理想とはるかにかけはなれているが、現実を理想に近づけるため、なにをなすべきか、ロータリアンとしてなにができるかを、ともに話し合い考えよう」と訴えた。

昨年11月26～28日 RI 会長主催南アジア親善会議がスリランカの首都コロomboで開かれた。参加者はインド、スリランカ、パキスタン、バングラデシュ、ネパールの5カ国のロータリアンとゲスト併せて約1,200人、一昨年の末デリーで行なわれた第1回会議の感激を胸に再びつどった5カ国のロータリアンは、より平和で豊かな南アジアをめざして語り合った。

ついでジャワルダナ大統領が「スリランカは多言語、多人種、多宗教の国でありながら差別はなく、異なる人種、宗教の人々が各方面で活躍している。なぜならば、我々は人類がひとつであることを信じ、すべての人々によりよい生活を享受できる機会を与えたいと欲しているからである」とのべ、さらに「参加者各人が、それぞれの母国の貧困を直視し、あらゆる手段をもって、南アジアの社会的諸問題の解決に努力してくれるよう」呼びかけた。

午前の本会議の最後に演壇に立ったインドの企画大臣 S. B. シャバン氏は南アジア諸国民が互いの抱える問題に理解を深め、協力し合える体制をつくりあげることの必要を強調した。

午後の本会議では、ロータリー活動の紹介が行なわれたほか、ラジュンドラ K. サブー RI 理事がロータリーの現況報告を行なった。そのあと質疑応答に移った。さまざまな興味深い質疑応答がくりかえされたが、そのなかで一つ明らかになったのは、ロータリー財団に多額の寄付をしている地区に、その見返りとして多くの追加奨学金が与えられている事実に対し、第三世界のロータリアンが微妙な感情を抱いているということであった。貧しい国々こそ、技術知識や教育をより必要としており、財団の奨学金をこれらの国々に振り向ければ、なお有意義ではないのかというのが彼等の考えであった。

二日目の本会議は「経済的、文化的、社会的交流を通して橋をかける」をテーマとして行なわれた。このテーマをめぐってバングラデシュの大蔵大臣 A. M. A. ムヒス氏が注目し値する基調講演を行なった。氏は「9億の人口をもつ南アジアの国々は不幸にして過去30年間協力し合うことができなかった。このような状況をつくり出した政治の壁をつきやぶる努力にいま明るい兆候が見え出している。いまこそ相互不信を捨て、無意味な論争をやめて、この地域から不名誉な貧困、飢餓、栄養失調を追放するために協力し合うべきときである」とよびかけたのである。

ついでパキスタンの著名な実業家そして慈善家である L. E. ジャマル氏が登壇し、産業発展と経済協力についての該博な知識にもとづいて南アジア5カ国が地域的生活向上のためにとるべき具体的な手段を概説した。

この会議の優れた特色として、職業別協議会が行なわれたことがあげられる。協議会は1981年の南アジア親善会議で採択された“デリー宣言”の実現をめざすロータリアンにより7グループに分かれて、二日目の午後行なわれた。熱心な討議のあと、種々の勧告案がまとめられたが、もしこれら勧告案が実施されるなら、本質的に田園社会である南アジア地域の農村を覚醒させることになるであろう。

これらグループはまた南アジア研究所の創設を勧告し、その実現に向けて早くもグループメンバーから基金を募り始めた。翌日の本会議でこの勧告案が発表されると、基金に応じるロータリアンの数はさらに増えていった。

会議の最終日のテーマは「青少年を通じて橋をかける」であった。ネパールの Y. カマル教授の基調演説のあと、ソリ・パブリ元 RI 理事をモデレーターとする、ロータリー会員のパネル討論がくりひろげられた。この自由討論のなかでパネルは、ロータリアンがなお一層ロータリー活動に参加してくれるよう求めた。

向笠会長はじめ1,200人の参加者の誰もが、この会議が成功であったことを認めたが、事実この会議は国際的な対話と親睦を深める素晴らしい機会となったのである。

南アジアでまたこの種親善会議が開かれるのは数年先のことになるかも知れない。だが友好の種子は蒔かれた。我々はそれが芽を出すのを楽しみにしており、やがてそれが平和と理解と協力という貴重な実をつける日がくることを切望するものである。

□ 筆者紹介 ザイゲラー氏はスリランカ生まれの評論家で、ロータリーのことに詳しい。